

作成日	2019 年 7 月 4日
学科・専攻名	音楽教育学専攻

教育課程・学習成果

1. 教育課程編成・実施の方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成していますか。

【現状説明】

音楽教育学専攻では教育課程編成・実施の方針に基づき、1 年次では、音楽に関する理論と実技を相互に関連付けると共に、音楽の歴史や演奏方法の基礎的技能を身につけ、2 年次では、発展的講義で音楽教育や演奏表現についての学びを深めつつ主体的に探究し考える力と表現する力を養っている。3 年次では、2 年次までの学びをさらに深め、4 つの分野（論文・作曲・ピアノ・声楽）に分かれて演習を行い、主体的学びを通じて課題発見力や課題解決力を身につけ、4 年次で、各分野の演習において一段と専門性の高い知識・技能を身につけ、生涯にわたって学び続ける能力の確立を目指して、各自が幅広く音楽学の分野についての知見を身につけることができるよう、各科目の関係・順次性を明示した体系的な教育課程を編成し実施している。また、学科のポリシーと授業科目との関係については、カリキュラム・マップや履修モデル等を通じて解説している。

【成果および向上施策】

教育の現場に関する社会的需要の拡大に対応するため、次期カリキュラム改定の際には、全体の科目数の増加にならない範囲で、管楽器関係の科目を強化する予定である。

【課題および改善施策】

特筆すべき事項なし。

2. 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための措置を講じていますか。

【現状説明】

音楽教育学専攻では、全年次において少人数演習科目を必修科目として配置している。1、2 年次では 15 名以下での演習、3、4 年次では 10 名以下の演習を行っている。卒業までの継続的なゼミ指導により、問題提起をして、追究する力、問題解決する力等の養成に注力している。また 1 年次の音楽教育学入門演習では、大学での学びの基礎となるアカデミック・スキルの習得を目的として、共通テキスト「アカデミック・スキル」の内容を踏まえた上で、3 名の教員がそれぞれ異なる角度から授業を工夫している。その他、履修登録者が多い科目では、同一科目を複数コマ開講することで適正規模による授業運営に努め、講義科目においてもグループワークやコメントシート、京女ポータルの諸機能を活用したフィードバック等のアクティブ・ラーニングを取り入れ、学生の主体的参加を促すよう工夫しているほか、専門科目への導入としては、1 年次に「ピアノ 1」、「声楽 1」、「音楽理論 1」など音楽の基礎に関する科目を開講し、前述のアカデミック・スキルも踏まえ、学生が円滑にその後に履修するであろう専門科目に取り組めるように配慮している。

【成果および向上施策】

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

2018 年度学生生活実態調査結果によると、「OG と接する機会が多い」の数値が大変低かったため、2018 年度より「音楽文化研究」にて職種の違う OG（教員・一般企業・音楽系企業・進学者など）をゲストスピーカーとして招聘し、大学での研究および将来のキャリアとの結びつきについて講演して頂く改善策を講じている。また、2019 年度には、「単位互換や

ゼミなど他大学との交流が盛んである」、「提出したレポートは、添削・フィードバックされることが多い」に関して改善策として、「音楽教育演習」にて関西学院大学との合同ポスター研究発表会（教育活動予算）を実施予定である。

3. 学生の学修成果を把握し、教育課程及びその内容、方法の適切性についての点検・評価を行っていますか。また、その結果をもとに教育の質向上に向けた取り組みを行っていますか。

【現状説明】

教育課程及びその内容、方法の適切性については、主に①発達教育学部「新入生プレースメントテスト（学習基礎力診断テスト）」の参照、②音楽教育学専攻独自のFD活動としての「質問票」および「FD通信」発行、③音楽教育学専攻独自のFD活動としての「到達度テスト」実施から点検・評価を行っている。①「新入生プレースメントテスト（学習基礎力診断テスト）」については、個人に結果を返却する前に、新入生の基礎学力の傾向を専攻内で共有し、今後の指導内容や方法を決定する上で参考としている。②FD活動としての「質問票」および「FD通信」発行は、全回生に対して年に2回実施している本専攻の重要な取り組みである。専門科目における学生の学修成果を、全員へのアンケートおよびFD委員（各学年に2名ずつ）と教員との交流会を通じて確認し、教育課程の見直し等につなげている。一方的に学生の要望を聞くだけでなく、対話（交流会）と刊行物（FD通信）を通して教員側の教育目的・意図を伝える役目も果たしており、学生との相互理解を深め学生の学修意欲を向上させる効果も含んでいる。③「到達度テスト」は3回生を対象として、卒業研究に向けたゼミナール開始前である前期終了前に毎年実施している。これまでの学修成果を把握するべく、分野別に本専攻の教員が問題を作成している。テスト結果は専攻内で共有されたうえで今後の指導内容や方法を決定する上での資料となり、学生にはゼミナール担当教員が対面にて解答および今後の課題を伝える形でフィードバックを行っており、教育の質向上に役立っている。

これらに加えて、毎年度、次年度の時間割を作成する作業の際に、カリキュラムの妥当性、担当者の選定などを専攻内の教務委員会および専攻会議で検証している。その他の改善に結びつける取り組みとしては、全学のFD講演会、学科内のFD研究会（教員によるグループワーク等）、FD交流会（事例発表）、公開授業への参加、学外のFD関連研修・講演会への個別参加等を通して行っている。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

2018年度学生生活実態調査結果では、本専攻の学生は、授業を通してコミュニケーション能力が培われていると感じている人が多い(p.97)。これは少人数制、アクティブ・ラーニングの成果(p.83-84)と考えられる。今後もこの点を活かした授業内容・方法を向上したい。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

専攻内にて、学生生活実態調査、卒業時満足度調査を検証し、学生の学修成果を把握する機会を設けることが、今後必要である。授業評価アンケートについても個人での検証に留まっており、専攻として組織的な検証に取り組むことが課題である。

また、今年度は原則4年に1度実施されるカリキュラム改革が開始された年であり、今後全学的な観点からも検証することが課題である。

教員・教員組織、FD

1. 教員組織の編成(募集・採用・昇任等)にあたって、職位構成および年齢構成の偏りに配慮した編成をおこなっていますか。また、カリキュラムに基づく教員組織となっていますか。

【現状説明】

音楽教育学専攻の平成 30（2018）年度における専任教員数は、教授 5 名、准教授 3 名であり、大学設置基準の必要教員数を十分に満たしている。年齢構成は、60 代が 1 名、50 代が 4 名、40 代が 3 名となっており、上手くバランスが取れていると言えよう。また本専攻では、中学校・高等学校の教員養成や広く生涯教育の場での音楽指導者育成を目的に、演奏、作曲、音楽教育・音楽学の領域を根幹としたカリキュラムを編成し、それに対応してピアノ、声楽、作曲、音楽教育、音楽学を研究分野とする教員を配置しており、カリキュラムと各研究分野が整合している。

【成果および向上施策】

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】

特筆すべき事項なし。

2. 学科・専攻独自の FD 活動を実施し、教員の資質向上に取り組んでいますか。

【現状説明】

音楽教育学専攻では独自の FD 活動として、半期ごとに、授業ならびに学修環境に関する学生への質問調査の実施と、調査結果を踏まえた教員・学生間での意見交換の場を設けている。2018 年度も、例年通り半期ごとに実施され、専任教員全員が調査結果を共有し、意見交換会に出席した。この活動が、教員の教育活動の検証・向上のための一つの機会となる他、「授業アンケート」や「学生生活実態調査」からの検証も専攻会議で行っている。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

内部評価委員会からの評価結果（内部評価結果レポート）

一般的なコメント（総評）
<p>目標が具体的に設定されており、達成のための施策が行われていると評価できます。</p> <p>各評価項目の【課題および改善施策】については、専攻会議等において定期的に検証し、次年度に進捗を報告してください。</p>
改善勧告コメント（具体的な改善の指示）
Empty space for improvement advice

内部評価結果レポートの改善勧告コメントに対する点検単位の意見

意見
Empty space for comments